

## 劇場支配人としてのヴォルフガング・ワーグナー

吉 田 真

### はじめに

ヴォルフガング・ワーグナー（Wolfgang Wagner, 1919-2010）は、19 世紀の作曲家リヒャルト・ワーグナー（Richard Wagner, 1813-1883）の孫である。また、祖母のコージマはフランツ・リスト（Franz Liszt, 1811-1886）の娘なので、リストのひ孫でもある。日本の芸術、芸能の多くが伝承芸で、親子で代々引き継ぐことが珍しくないのに対し、ヨーロッパの芸術は原則的に個人の所産とされ、著名な芸術家の末裔が注目されることはほとんどない。しかし、そうした中でワーグナー家だけは例外である。それはリヒャルト・ワーグナーの遺した作品のためではなく、彼が 1876 年に始めたバイロイト祝祭という事業のためである。この世界初の芸術フェスティバルは、代々ワーグナー家の人間が総裁を務め、今日に至っている。ヴォルフガング・ワーグナーは、その 6 代目の総裁ということになる。

ヴォルフガング・ワーグナーは、バイロイト祝祭総裁の在任期間が 58 年という最長記録を有していたばかりでなく、一劇場支配人としても、その長さ

は演劇史において異彩を放っている。それにもかかわらず、ヴォルフガング・ワーグナーに特化して書かれた書物は、500 ページを超える浩瀚な自伝 Wolfgang Wagner: Lebens-Akte<sup>1</sup>（1994）を別とすれば、104 ページのパンフレット Oswald Georg Bauer: Wolfgang Wagner. Arbeitsprinzipien eines Regisseurs<sup>2</sup>（1979）と、主に記録と写真、インタビューで構成された Oswald Georg Bauer: Wolfgang Wagner. A Scrapbook in his Memory<sup>3</sup>（2012）しか見当たらない。しかも、どちらも一般書店では取り扱いのない広報性の高い出版物である。もちろんバイロイト祝祭について、またはワーグナー家について書かれた書物は夥しい数が出版されており、その中にはヴォルフガング・ワーグナーに関する記述も少なくないが、天才演出家として名声を得た兄のヴィーラント・ワーグナーに比べると、その扱いは著しく見劣りがする<sup>4</sup>。しかし、バイロイト祝祭総裁の仕事は舞台演出だけではない。ヴィーラントと共同で総裁を務めていた時代から、劇場支配人としてのあらゆる業務をヴォルフガング・ワーグナーは一手に引き受けてきた<sup>5</sup>。来日回数も多く、バイロイト祝祭総裁としても、ワーグナー家の人間としても、彼ほど日本を頻繁に訪れた人物

はいない。そこで、本稿はこのヴォルフガング・ワーグナーの過小評価されがちな功績を再検証する目的で書かれた。

## 1. ワーグナー家<sup>6</sup>とバイロイト祝祭<sup>7</sup>

1883年、リヒャルト・ワーグナーの死後、バイロイト祝祭はリストの娘で、未亡人のコージマ<sup>8</sup> (Cosima Wagner, 1837-1930) が引き継いだ。リヒャルト・ワーグナーの生前、バイロイト祝祭は舞台祝祭劇《ニーベルングの指環》四部作の初演となった1976年と舞台神聖祝祭劇《パルジファル》の初演となった1882年の2回しか開催できなかったため、バイロイト祝祭を1883年から定期的に開催し、軌道に乗せたのは、もっぱらコージマの功績だと言える。コージマは、リヒャルト・ワーグナーが実現できなかった、《ニーベルングの指環》と《パルジファル》以外の5演目を次々とバイロイト祝祭で上演し、ワーグナー上演の模範を世界に示した。コージマの舞台演出は、夫の遺産を忠実に守ることを旨としていたため、その保守的姿勢が今日のワーグナー上演史の視点からは批判されがちだが、バイロイト祝祭の礎を築いた功績は疑うべくもない。

1906年にコージマは自分の役割を終えたと自覚し、バイロイト祝祭の総裁の地位を長男のジークフリート<sup>9</sup> (Siegfried Wagner, 1869-1930) に譲った。ジークフリートは、すでに年からバイロイト祝祭の指揮者として活躍していたが、この年からは総裁として舞台演出も手掛けることになった。ジークフリートは両親に比べて、温厚な性格と柔軟な思考の持ち主として知られ、バイロイト祝祭の舞台に最新の立体的な舞台装置を導入し、初の外国人指揮者としてイタリア人のアルトゥーロ・トスカニーニ (Arturo Toscanini, 1867-1957)

を招聘するなど、多くの改革を行なった。しかし、ジークフリートは1930年、92歳で亡くなった母コージマの後を追うかのように同年61歳で世を去る。

総裁ジークフリートの後を継いだのは33歳の未亡人ヴィニフレート<sup>10</sup> (Winifred Wagner, 1897-1980) である。ヴィニフレートは義母コージマ、亡夫ジークフリートとは違って特段の芸術的素養を持っていなかった。そこで、自身は総裁の地位に就いたまま、指揮者兼演出家でベルリンのプロイセン国立歌劇場総支配人ハインツ・ティーティエン (Heinz Tietjen, 1881-1967) を芸術監督に迎えた。英国生まれのヴィニフレートは外国出身というコンプレックスゆえか、バイロイト・サークルに巣くう国粹主義に深く染まり、ワーグナー崇拜者で早くからバイロイト訪問を繰り返していたアドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler, 1889-1945) と交友関係を結び、ナチスに入党した。1933年にヒトラーが政権を握ると、バイロイト祝祭はヒトラー肝いりで、ナチス・ドイツの国家行事の観を呈するようになる。2年続けて1年休演するという開催スケジュールも1936年からは毎年開催されることになった。第二次世界大戦中も、国内の劇場が次々と閉鎖される中で、バイロイト祝祭は戦時特別公演として1944年まで続けられ、戦地での負傷兵の慰問施設の役割も果たした。

第二次世界大戦ではバイロイト祝祭劇場は損壊を免れたが、ワーグナー家の私邸だったヴァーンフリート館は爆撃で半壊するなどの損害を受けた。戦後はアメリカ占領軍によって祝祭劇場は進駐軍の慰問用で使用され、舞台の小道具なども持ち去られてしまった。しかし、戦後の再開を阻む一番の問題は、バイロイトとヒトラーの関係を清算することだった。戦後、非ナチ化裁判にかけられたヴィニフレートは軽微な罪に問われただけで

釈放されたが、パイロイト祝祭の再開のためには総裁ヴィニフレートの引退は絶対条件だった。そこで、二人の息子34歳のヴィーラント<sup>11</sup> (Wieland Wagner, 1917-1966) と32歳のヴォルフガングが共同で総裁の地位を引き継ぎ、パイロイト祝祭は1951年に再開された。

ヴィーラント・ワーグナーが手掛けた新演出は、物資不足を逆手にとって舞台装置を極力減らし、歌手の演技も最小限に留め、主に照明の変化によって進行するという新機軸を生み出し、これは「新パイロイト様式」と呼ばれて大成功を収めた。一方、弟のヴォルフガングも兄と並行して演出を手掛けたが、ヴィーラント演出のインパクトが強かったため、常に二番煎じの評価しか与えられず、その手腕は、観客からは認識されにくい劇場運営の面に発揮された。1966年、ヴィーラント・ワーグナーが49歳で病没すると、弟のヴォルフガングが単独でパイロイト祝祭の総裁を務めることになった。ここからが名実共にヴォルフガング時代ということになるだろう。

ヴォルフガング時代は、彼が89歳で勇退する2008年まで続いた。兄のヴィーラントと共同でパイロイト祝祭の総裁に就任して以来、実に58年の長きに亘ってその地位にあった。これは、ワーグナー家が代々引き継ぐというパイロイト祝祭の特殊性を考慮しても、ひとつの劇場の支配人の任期としては前代未聞の長さである。この異例の長期政権には当然多くの批判もあった。その批判者の中には、ヴォルフガングの姉フリーデリント<sup>12</sup> (Friedelind Wagner, 1918-1991)、兄ヴィーラントの娘ニーケ<sup>13</sup> (Nike Wagner, 1945-)、そしてヴォルフガング自身の長男ゴットフリート<sup>14</sup> (Gottfried Wagner, 1947-) までがいて、あたかもお家騒動の様相を呈し、しばしばマスコミを騒がせていた。

ヴォルフガング・ワーグナーが高齢になってからも総裁の地位を退かなかったのは、なかなか後継者が決まらなかったためだが、それには二番目の妻となったグードルン (Gudrun Wagner, 1944-2007) の影響力が大きかったと言われる。ヴォルフガングには最初の妻エレン (Ellen Wagner, 1919-2002) との間に長女エーファ (Eva Wagner-Pasquier, 1945-) と長男ゴットフリートとがあったが、ゴットフリートは父の批判者としてワーグナー家を追われ、エーファは父親の協力者としてパイロイト祝祭の業務に就いていたが、1976年にヴォルフガングがエレンと離婚して、ワーグナー研究者ディートリヒ・マック (Dietrich Mack) の元夫人グードルンと再婚し、2年後に次女カタリーナ (Katharina Wagner, 1978-) が生まれると、ヴォルフガングは総裁の地位を譲るまでカタリーナの成長を待つかのように引退を拒否続ける。

2007年にヴォルフガング夫人のグードルンが手術の後に急死すると事態は急展開を迎えた。ヴォルフガングは母親違いの二人の娘、63歳のエーファと30歳のカタリーナを共同総裁として後継者に推薦し、2008年に89歳で勇退する。前年の2007年にカタリーナを《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の演出家としてパイロイト祝祭にデビューさせ、それを見届けての決断だった。しかし、親子ほど年の離れた姉妹のエーファとカタリーナの共同総裁の時代は長くは続かず、2015年をもってエーファが退任してからはカタリーナ・ワーグナーが単独の総裁として今日に至っている。これはリヒャルト・ワーグナーから数えると、ひ孫ながら8代目ということになる。

## 2. 演出家としてのヴォルフガング・ワーグナー

バイロイト祝祭におけるヴォルフガング・ワーグナーの演出は、ヴィーラント・ワーグナーの存命中は兄の名声に隠れていたとはいえ、その後もしばしば新演出を手掛け、58年間総裁を務めただけあって、その回数は147年に及ぶバイロイト祝祭の歴史の中でも最高を記録している。以下はヴォルフガング・ワーグナーのバイロイト祝祭における演出および舞台美術の一覧である<sup>15</sup>（括弧内は再演の年度。回数は年度の合計で、個々の上演回数ではない）。

1953年《ローエン格林》（1954年）全2回  
1955年《さまよえるオランダ人》  
（1956年）全2回  
1957年《トリスタンとイゾルデ》  
（1958年、1959年）全3回  
1960年《ニーベルングの指環》  
（1961年、1962年、1963年、1964年）全5回  
1967年《ローエン格林》  
（1968年、1971年、1972年）全4回  
1968年《ニュルンベルクのマイスタージンガー》  
（1969年、1970年、1973年、1974年、1975年）  
全5回  
1970年《ニーベルングの指環》  
（1971年、1972年、1973年、1974年、1975年）  
全6回  
1975年《パルジファル》  
（1976年、1977年、1978年、1979年、1980年、  
1981年）全7回  
1981年《ニュルンベルクのマイスタージンガー》  
（1982年、1983年、1984年、1986年、1987年、

1988年）全7回  
1985年《タンホイザー》  
（1986年、1987年、1989年、1992年、1993年、  
1995年）全7回  
1989年《パルジファル》  
（1990年、1991年、1992年、1993年、1994年、  
1995年、1996年、1997年、1998年、1999年、  
2000年、2001年）全13回  
1996年《ニュルンベルクのマイスタージンガー》  
（1997年、1998年、1999年、2000年、2001年、  
2002年）全7回

まず、最初の2演目、《ローエン格林》<sup>16</sup>と《さまよえるオランダ人》<sup>17</sup>は、それぞれ2年間で終了している。これは必ずしも評判が良くなかったためではなく、1951年のルドルフ・ハルトマン（Rudolf Hartmann, 1900-1988）演出の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》と1952年のヴィーラント・ワーグナー演出の《トリスタンとイゾルデ》も、それぞれ2年間で終了していることから、新演出の回転を速くするという戦後の方針があったものと思われる。ただし、1951年のヴィーラント演出の《ニーベルングの指環》は8年間、《パルジファル》は実に23年間続いたのだから、ヴォルフガング演出が特別に高い評価を受けなかったことは確かだろう。1957年《トリスタンとイゾルデ》<sup>18</sup>の3回、1967年《ローエン格林》<sup>19</sup>の4回は、標準的な上演回数と言える。《ニーベルングの指環》は四部作の大作なので、1960年からの5回<sup>20</sup>、1970年からの6回<sup>21</sup>というのも標準的な回数である。

この中において1985年《タンホイザー》<sup>22</sup>の7回はかなり多い方に属する。この演出は特に高い評価を得たわけではないが、バイロイト祝祭史上、初めて「ドレスデン版」による上演であったこと

に意義がある。パイロイトではコージマ・ワーグナーが初めて《タンホイザー》を上演した際、ワーグナー自身が遺した最終稿として「パリ版」を採用した。これが1930年まで踏襲されるが、第二次世界大戦後、1954年、1961年、1964年と、3度の演出をしたヴィーラント・ワーグナーは、それまでの伝統に従わず、その都度ドレスデン版とパリ版を組み合わせた独自の折衷版で上演していた。その際、毎回異なるカットを施していたが、これは今日から振り返ると、むしろヴィーラント演出の欠点に数えられる。1972年のゲッツ・フリードリヒ演出では省略のない折衷版が採用され、ひとつの典型的な上演形態を示したが、ヴォルフガング・ワーグナーは作品の初演時に近いドレスデン版を採用することで、もうひとつの規範を示したと言える。その後、パイロイト祝祭の《タンホイザー》はドレスデン版を基本として上演されるようになった。その意味で、ヴォルフガング演出の《タンホイザー》は一定の影響力を持ったと評価できる。

この《タンホイザー》のプロダクションは、映像収録された1989年に東急文化村オーチャードホールの柿落しに招かれて東京公演を果たしており<sup>23</sup>、ヴォルフガング・ワーグナー自身も、グードルン夫人、次女のカタリーナを伴って来日した。パイロイト祝祭の海外公演というのは異例のことである。日本公演では1967年に大阪のフェスティバルホールが柿落しにパイロイト祝祭に出演経験のある指揮者と歌手陣を招き、ヴィーラント・ワーグナー演出の《トリスタンとイゾルデ》と《ワルキューレ》を上演したことがあり、通称「大阪パイロイト」として知られているが、このときはオーケストラが日本のNHK交響楽団だったこともあり、パイロイト祝祭側の記録では本格的な引っ越し公演とは認められていない。ただし、ヴィーラ

ント・ワーグナーはその前年に没していたため、この機会がヴォルフガング・ワーグナーの初来日となった。また、ワーグナー没後100年に当たる1983年に二期会が上演した《ジークフリート》日本初演の際にもヴォルフガング・ワーグナーは来日している。

ヴォルフガング・ワーグナーの演出で最も注目に値するのは《ニュルンベルクのマイスタージンガー》と《パルジファル》の2演目であろう。前者は3回も演出しており、その上演回数も、それぞれ5回、7回、7回という多さである。《パルジファル》の演出は2回だが、上演回数は、それぞれ7回、13回と、やはり群を抜いて多い。いずれもヴォルフガング・ワーグナーが単独で総裁を務めていた時期なので、上演の決定権を本人が握っていたことは確かだが、観客の評判が高くなければ、これほど再演を続けることは難しい。ヴォルフガング演出が特にこの二つの演目で成功を収めたことには理由がある。

歌劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》は、古代ゲルマン神話や中世ドイツの伝説を原作としたワーグナーの作品の中では例外的に、歴史的題材に基づく喜劇である。事実上の主人公であるハンス・ザックスは16世紀のニュルンベルクに実在した靴職人のマイスタージンガー（職匠歌人）だった。ヴィーラント・ワーグナーはパイロイト祝祭で《ニュルンベルクのマイスタージンガー》を二度演出しているが、照明を駆使した象徴的手法で名を上げたヴィーラントにとって、この作品の演出は鬼門であり、最初の1956年の演出では、第2幕で舞台となるニュルンベルクの街並を消し去ってしまったため、「ニュルンベルクなしのマイスタージンガー」と揶揄され、年ごとに街並を少しずつ復活させるという妥協を余儀なくされていった<sup>24</sup>。1963年の二度目の演出では、

「喜劇」ということから、ワーグナーが少年期に心酔していたシェイクスピアのグローブ座を再現した舞台を作るというアイデアを打ち出したが、観客の支持は得られず、2年間の上演で終了することになってしまった<sup>25</sup>（一方、1962年の《トリスタンとイゾルデ》はヴィーラントの代表的な演出となり、1970年まで上演が続けられた）。

《ニュルンベルクのマイスタージンガー》は人気演目にもかかわらず、パイロイトでは「天才演出家」ヴィーラント・ワーグナーが二度も失敗していただけに、過激な新機軸を狙わない1968年のヴォルフガング演出は観客に安堵感を与え、広く歓迎された<sup>26</sup>。とはいえ、ヴォルフガングの演出はけっして伝統的な演出そのままでなく、ヴィーラントと共に築いた「新パイロイト様式」を巧みに織り込み、保守的な観客にも抵抗のない舞台を作ることに成功している。たとえば第3幕の歌合戦の場では巨大な円形の舞台が置かれたが、これは全くリアルな舞台装置ではないにもかかわらず、この作品そのものが包含しているリアリズムとファンタジーの融合を絶妙なバランス感覚でデザインしたものだ<sup>27</sup>。

ヴォルフガングの二度目の演出は<sup>27</sup>、最初の演出を軸としながらも、写実的な要素を強め、また三度目の演出では反対に抽象性を強めるという具合に特徴を変化させ<sup>28</sup>、いずれも視覚的に美しい舞台を作り出したという点において、作品との相性の良さを感じさせる。ヴォルフガング自身もこれらの演出には自信を持っていたと見えて、1984年と1999年には無観客上演を映像収録し、特に前者のDVDは今日でもなお《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の標準的かつ代表的な上演記録と見做されている。この作品では、敵役のベックメッサーが歌合戦の大舞台で恥をかかされ、怒って退場するという設定が現代の感覚とは合わ

なくなっているという問題があるが、この映像では幕切れにヴォルフガング自身が舞台上に登場して、ベックメッサーとザックスを和解させて終わるという演出を見せている。これを安直な解決であるとか、あざといと見る向きもあるだろうが、この作品をあくまで健全な「喜劇」として終わらせるためには、ひとつの有効な解決策であったと言える。もちろん全ての公演にヴォルフガングが出演したわけではなく、各年度の最終公演にサブライズで登場することが多かったようだが、彼が記録に残る映像収録にあえて出演したのは、自分の人気を頼みにした勝算あつてのことだろう。

もうひとつの作品《パルジファル》については事情が全く異なる。《パルジファル》は、兄のヴィーラント・ワーグナーが1951年に新演出し、彼の死を越えて1973年まで23年間続けられた最も成功したプロダクションであり、「新パイロイト」を代表する演目だった。ヴォルフガング・ワーグナーが1975年に初めてこの作品を演出した時には<sup>29</sup>、《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の場合とは反対に、好評だった兄ヴィーラントの路線を引き継ぐ方針を取った。このバランス感覚の鋭さがヴォルフガング・ワーグナーの最大の長所だと言って良いだろう。とはいえ、ヴォルフガング演出の《パルジファル》に全く新機軸がなかったわけではない。特に幕切れでは本来、異教徒の女クンドリーは聖盃城で息絶えて救済されるという設定だが、これをヴォルフガングはクンドリーを死なせることなく、聖盃城が受け入れるという現代に通じやすい解釈を施した。この解決策は先の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の場合と同様である。

この《パルジファル》のプロダクションは1981年まで7年間続けられたが、《パルジファル》初演100年を迎えた1982年には、あえて前

衛的な手法を取るゲッツ・フリードリヒに新演出を委ねた。そしてこの賛否両論を生んだフリードリヒ演出を1988年で終了させると、1989年からは再びヴォルフガング自身が二度目の新演出を行ない<sup>30</sup>、ここでも極端に振れる一歩手間でバランスを回復させた。二度目の新演出とはいえ、ヴォルフガング演出の《パルジファル》は基本的に「新バイロイト様式」を踏襲していた。このプロダクションは2001年まで13年間続けられたが、そのおかげで筆者は2001年の最終年度の公演を感激することが出来て、辛うじて「新バイロイト様式」に触れる最後の機会が得られたのである。

兄のヴィーラントとは違って、ヴォルフガングがバイロイト以外の劇場で演出を手掛けた例は少なく、これが演出家としてのヴォルフガング・ワーグナーの評価が低い原因のひとつとなっているが、最後に注目に値する三つのプロダクションを挙げておきたい。1978年にヴォルフガングはミラノ・スカラ座で《トリスタンとイゾルデ》の演出をしているが、これは稀代の人気指揮者のカルロス・クライバーが出演した公演だった<sup>31</sup>。前衛的な演出を好まなかったクライバーにとって、バイロイトで互いに信頼を得たヴォルフガング・ワーグナーの演出は最善ものだったに違いない。また、1988年には、まだ東ドイツだったドレスデン国立が劇場で《さまよえるオランダ人》を演出していることも見逃せない<sup>32</sup>。ヴォルフガング・ワーグナーとしても、この作品の演出は1955年のバイロイト以来だったと思われる。筆者はこのプロダクションを2000年9月に観ることが出来たが、明らかに時代遅れの演出に失望はしたものの、やはり往年の「新バイロイト様式」に片鱗に触れることが出来たと思っている。そして1997年には、東京の新国立劇場の柿落し公演のためにヴォルフガング・ワーグナーが来日し、《ローエ

ングリン》を新演出した<sup>33</sup>。しかし、この公演は直前になって主役歌手が交代するなどのトラブルに見舞われ、そのためもあって期待ほどの好評を得ることが出来なかった。これは結果的にヴォルフガング・ワーグナーの生涯最後の演出となっただけに、その後、一度も再演されることなく終わってしまったことが惜しまれる。

### 3. プロデューサーとしてのヴォルフガング・ワーグナー

1966年にヴィーラント・ワーグナーが亡くなったから、単独のバイロイト祝祭総裁となったヴォルフガング・ワーグナーだったが、それまで兄と分担していた演出を全て単独で担当することは不可能だった。バイロイト祝祭の歴史においては、1930年から44年のヴィニフレート・ワーグナーの時代にハインツ・ティーティエンが芸術監督として演出を一手に引き受け、第二次世界大戦後の最初の2年間に《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の演出のためにルドルフ・ハルトマンの助力を得たことを例外として、一貫してワーグナー家の当主である総裁が演出を行ってきた。しかし、時代は変わり、オペラにも演劇と同様に演出家の解釈を前面に打ち出す個性的な演出が求められるようになっていた。そこでヴォルフガング・ワーグナーは自分の演出に加えて、随時外部から優れた演出家を招聘することにする。ヴォルフガング・ワーグナー総裁の下で新演出が行われたバイロイト祝祭のプロダクションは以下のとおりである<sup>34</sup>（前節に掲げたヴォルフガング自身の演出を除く）。

1969年《さまよえるオランダ人》  
アウグスト・エヴァーディング演出

- (1970年, 1971年)全3回  
1972年《タンホイザー》  
ゲッツ・フリードリヒ演出  
(1973年, 1974年, 1977年, 1978年)全5回  
1974年《トリスタンとイゾルデ》  
アウグスト・エヴァーディング演出  
(1975年, 1976年, 1977年)全4回  
1976年《ニーベルングの指環》  
パトリス・シェロー演出  
(1977年, 1978年, 1979年, 1980年)全5回  
1978年《さまよえるオランダ人》  
ハリー・クプファー演出  
(1979年, 1980年, 1981年, 1982年, 1984年,  
1985年)全7回  
1979年《ローエングリン》  
ゲッツ・フリードリヒ演出  
(1980年, 1981年, 1982年)全4回  
1981年《トリスタンとイゾルデ》  
ジャン＝ピエール・ポネル演出  
(1982年, 1983年, 1986年, 1987年)全5回  
1982年《パルジファル》  
ゲッツ・フリードリヒ演出  
(1983年, 1984年, 1985年, 1987年, 1988年)  
全6回  
1983年《ニーベルングの指環》  
ピーター・ホール演出  
(1984年, 1985年, 1986年)全4回  
1987年《ローエングリン》  
ヴェルナー・ヘルツォーク演出  
(1988年, 1989年, 1990年, 1991年, 1993年)  
全6回  
1988年《ニーベルングの指環》  
ハリー・クプファー演出  
(1989年, 1990年, 1991年, 1992年)全5回  
1990年《さまよえるオランダ人》  
ディーター・ドルン演出  
(1991年, 1992年, 1993年, 1994年, 1998年,  
1999年)全7回  
1993年《トリスタンとイゾルデ》  
ハイナー・ミュラー演出  
(1994年, 1995年, 1996年, 1997年, 1999年)  
全6回  
1994年《ニーベルングの指環》  
アルフレート・キルヒナー演出  
(1995年, 1996年, 1997年, 1998年)全5回  
1999年《ローエングリン》  
キース・ウォーナー演出  
(2000年, 2001年, 2002年, 2003年, 2005年)  
全6回  
2000年《ニーベルングの指環》  
ユルゲン・フリム演出  
(2001年, 2002年, 2003年, 2004年)全5回  
2002年《タンホイザー》  
フィリップ・アルロー演出  
(2003年, 2004年, 2005年, 2007年)全5回  
2003年《さまよえるオランダ人》  
クラウス・グート演出  
(2004年, 2005年, 2006年)全4回  
2004年《パルジファル》  
クリストフ・シュリンゲンジーフ演出  
(2005年, 2006年, 2007年)全4回  
2005年《トリスタンとイゾルデ》  
クリストフ・マルターラー演出  
(2006年, 2008年, 2009年, 2011年, 2012年)  
全6回  
2006年《ニーベルングの指環》  
タンクレート・ドルスト演出  
(2007年, 2008年, 2009年, 2010年)全5回  
2007年《ニュルンベルクのマイスタージンガー》  
カタリーナ・ワーグナー演出



(2008年, 2009年, 2010年, 2011年) 全5回  
2008年《パルジファル》  
ステファン・ヘルハイム演出  
(2009年, 2010年, 2011年, 2012年) 全5回

これらの演出家は、少なくともヨーロッパの演劇界に精通していれば目を見張るほどの顔ぶれで、各年代を代表するオペラや演劇の演出家が、ことごとくバイロイト祝祭に招聘されていることが分かる。これは間違いなくプロデューサーとしてのヴォルフガング・ワーグナーの功績である。これらのプロダクションの特徴を論じるのは本稿の趣旨ではないが、各演出家のプロフィールだけでも紹介しておきたい。

アウグスト・エヴァーディング (August Everding, 1928-1999) は演劇の演出家だったが、その後活動の軸足をオペラに移し、バイエルン州立歌劇場の総裁を務めた。ヴォルフガング・ワーグナーが外部から招聘した最初の演出家としては妥当な選択だったと言える。特に指揮者からの評判が良かったので、《さまよえるオランダ人》はカール・ベーム、《トリスタンとイゾルデ》ではカルロス・クライバーが指揮し、いずれもバイロイト史に特筆される公演となった。

ゲッツ・フリードリヒ (Götz Friedrich, 1930-2000) は東ドイツ出身だったが、このバイロイトの《タンホイザー》における成功を機に西ドイツに亡命、その後西ベルリンのベルリン・ドイツ・オペラの総裁となり、全てのワーグナー作品の演出をして、当代の代表的なワーグナーの演出家と認められた (1987年、日本で初めて《ニーベルングの指環》四部作を上演したのは、このベルリン・ドイツ・オペラのフリードリヒ演出である)。この経緯を見ると、彼の成功のきっかけを作ったのはヴォルフガング・ワーグナーだと言えるだろう。

フランス人のパトリス・シェロー (Patrice Chéreau, 1944-2013) は演劇の演出家だったが、バイロイトにデビューした時はまだ31歳で、オペラ界ではほとんど知られていなかった。このバイロイト祝祭100年目の《ニーベルングの指環》は、舞台を作品が作られた19世紀のドイツに設定し、その衝撃は観客に激しい拒絶反応を巻き起こしたが、再演を重ねるごとに改良を加えると同時に観客の理解も進み、5年目に映像収録されて全世界に知られるようになってからは、その後のあらゆる《指環》演出に決定的な影響を与えるに至った。

ハリー・クプファー (Harry Kupfer, 1935-2019) は東ベルリンの小歌劇場コーミッシェ・オーパーで活動していたオペラの演出家で、バイロイトの《さまよえるオランダ人》で名声を得てからはベルリン国立歌劇場の演出家となり、《ニーベルングの指環》四部作をはじめ、多くの演目で来日公演を果たしている。日本では新国立劇場で《パルジファル》の演出も手掛けた。

フランス人のジャン＝ピエール・ポネル (Jean-Pierre Ponnelle, 1932-1988) はザルツブルク祝祭で活躍、モーツァルトのオペラで当時を代表する演出家だったが、バイロイトの《トリスタンとイゾルデ》も注目を浴び、このプロダクションは映像収録された。

パトリス・シェローの後、ワーグナーの没後100年となる1983年の《ニーベルングの指環》の演出に招かれたのは、指揮者のゲオルク・ショルティが望んだ英国を代表する演出家ピーター・ホール (Peter Hall, 1930-2017) だったが、彼らが意図した「ロマンティックな《リング》」は、逆に時代錯誤との批判も受けた。

ヴェルナー・ヘルツォーク (Werner Herzog, 1942-) はオペラに取り憑かれた男を題材とした

映画『フィッツカラルド』の監督として世界に知られた演出家である。それだけに彼が演出した雪景色の中の「冬の《ローエン格林》」は映像美が特徴だった。

ディーター・ドルン(Dieter Dorn, 1935-)はミュンヘンの劇団カマーシュピールレの総裁で、彼が演出したゲーテの戯曲『ファウスト』は、1990年に東京の日生劇場でも上演され大きな話題を呼んだ。パイロイトでは《さまよえるオランダ人》を演出したのみである。

ハイナー・ミュラー(Heiner Müller, 1929-1995)は東ドイツ出身で、ベルトルト・ブレヒト(Bertolt Brecht, 1898-1956)を継ぐ劇作家として彼が創設したベルリナー・アンサンブルを率いていたが、『ハムレット・マシーン』のような前衛演劇の作家として知られるハイナー・ミュラーが、パイロイトでワーグナーの作品を演出したことは演劇界の一大事件であり、世界に驚きをもって迎えられた。この《トリスタンとイゾルデ》では、舞台衣装をヨージ・ヤマモト(山本耀司)が手掛けたことも特に日本では大きく報道された。

《ニーベルングの指環》のアルフレート・キルヒナー(Alfred Kirchner, 1937-)演出は、むしろロザリーエ(Rosalie, 1953-2017)の舞台美術の方が注目を浴びた。ロザリーエは日本の新国立劇場の《ローエン格林》でも舞台美術を手掛けた。

英国の演出家キース・ウォーナー(Keith Warner, 1956-)は、日本の新国立劇場で非常にインパクトのある《ニーベルングの指環》を演出し、「トーキョー・リング」として有名になったが、パイロイトでの演出は《ローエン格林》のみに留まっている。

「ミレニアム・リング」と呼ばれた2000年の《ニーベルングの指環》の演出は、ドイツの大物

演出家ユルゲン・フリム(Jürgen Flimm, 1941-2023)に委ねられ、期待どおりの王道の演出を行なった。一方、フランス人のフィリップ・アルロー(Philippe Arlaud)は舞台照明出身の演出家で、カラフルで幻想的な《タンホイザー》の舞台を作り出した。

前衛的な演劇の演出家として知られたクリストフ・シュリンゲンジーフ(Christoph Schlingensiefel, 1960-2010)の《パルジファル》と、クリストフ・マルターラー(Christoph Marthaler, 1951-)の《トリスタンとイゾルデ》は、いずれも観客に理解され、支持されたとは言えないが、パイロイトの実験精神が典型的に発揮された例だった。

タンクレート・ドルスト(Tankred Dorst, 1925-2017)は、アーサー王伝説に基づく戯曲『マーリン』で知られたドイツの長老劇作家で、彼がパイロイトで《ニーベルングの指環》を演出するというのは、ハイナー・ミュラーの場合とは別の意味で驚きをもって迎えられた。

ヴォルフガング・ワーグナーがパイロイト祝祭の総裁退任の年、最後に《パルジファル》に招聘したのは、ノルウェイの演出家ステファン・ヘルハイム(Stefan Herheim, 1970-)で、彼は今日、最も才能のあるオペラの演出家として活躍している。戦後、一度もワーグナー作品を上演していなかったザルツブルク祝祭が、ワーグナー生誕200年の2013年に例外的に演目に取り上げた《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の演出もヘルハイムだった。彼はその後パイロイトで演出する機会がないが、ヘルハイムのパイロイト招聘はヴォルフガング・ワーグナーの最後の慧眼のなせる業とすることが出来るだろう。

## まとめ

このように、ヴォルフガング・ワーグナーは、特に1967年、単独のバイロイト祝祭総裁となつてからは、自分の演出によるプロダクションを軸としつつ、いわば前衛的な演出家と保守的な演出家、あるいは著名な演出家と無名の新人演出家を入れ代わり立ち代わり起用することで、常に注目を浴び、なおかつ高水準の上演を確保するという劇場プロデューサーの業務を長期間にわたり果たしてきた。もちろん、オペラの舞台公演というものは、その都度、指揮者の選定、歌手の選定やコンディションなど、様々な要素が絡み、その全ての上演が成功したとは言えないし、全ての上演が高い評価を得ているわけではないが、このヴォルフガング・ワーグナーの業績に匹敵する人物を見出すことは難しい。

ワーグナー上演の総本山であるバイロイト祝祭という特別な位置づけ、ワーグナー家の代表者という恵まれた立場にあったことは事実だが、それにしても58年にわたって、これほどの成果を上げ続けた手腕は並大抵のものではない。そこにはまた、一般に表面に現れることのない「劇場経営者」としての顔もあるのだが、それについては稿を改めて論じることにしよう。

## 註

- 1 Wolfgang Wagner: *Lebens-Akte*. München, 1994 [以下、LAと略記]
- 2 Oswald Georg Bauer: *Wolfgang Wagner. Arbeitsprinzipien eines Regisseurs*. Bayreuth, 1979
- 3 Oswald Georg Bauer: *Wolfgang Wagner. Festival Administrator. Opera Director. Building Project Manager. A Scrapbook in his Memory*. Bayreuth, 2012 [以下、OGBと略記]
- 4 Geoffrey Skelton: *Wagner at Bayreuth*. 1965/76 (邦訳: ジョフリー・スケルトン『バイロイト音楽祭の100年』, 山崎敏光訳, 音楽之友社, 1976年) [以下、スケルトンと略記] 210頁「一方、ヴォルフガング・ヴァーグナーがときどき行なった演出は、それ自体の特徴からというよりは、兄のものと比較して評価されるのは避けられず、したがって一般的には低いものとみなされがちであった」。
- 5 スケルトン 210頁「しかしながら、ヴォルフガング・ヴァーグナーの事務的才能に関しては、いささかの疑問の余地もない。それは、音楽祭の毎日の運営、歌手、指揮者、オーケストラ奏者、舞台のスタッフ、等々の契約（これ自体も理念を異にする他の音楽祭との競合を考えると容易ならざるものがある）のみならず、財政的面でも、才能を発揮した」。
- 6 ワーグナー家については Hans-Joachim Bauer: *Die Wagners – Macht und Geheimnis einer Theaterdynastie*. Frankfurt a.M. 2001 (邦訳: ハンス=ヨアヒム・パウアー『ワーグナー王朝』吉田真, 滝藤早苗訳, 音楽之友社, 2009年) 参照。
- 7 リヒャルト・ワーグナーとバイロイト祝祭については、吉田真『ワーグナー』音楽之友社, 2005年 参照。
- 8 コージマ・ワーグナーについては、George R. Marek: *Cosima Wagner*. New York 1981 (邦訳: ジョージ・R・マレック『ワーグナーの妻コジマ』伊藤欣二訳, 中央公論社, 1983年) 参照。
- 9 ジークフリート・ワーグナーについては、Peter P. Pachl: *Siegfried Wagner – Genie im Schatten*. München 1988 参照。
- 10 ヴィニフレート・ワーグナーについては、Brigitte Hamann: *Winifred Wagner oder Hitlers Bayreuth*. München. 2002 (邦訳: ブリギッテ・ハーマン『ヒトラーとバイロイト音楽祭 ヴィニフレート・ワーグナーの生涯 上・下』鶴見真理訳, 吉田真監訳, アルファベータ, 2010年) 参照。
- 11 ヴィーラント・ワーグナーについては、Berndt W. Wessling: *Wieland Wagner – Der Enkel*. Köln 1997 参照。
- 12 フリーデリント・ワーグナーの著書 Friedelind Wagner, Page Cooper: *Heritage of Fire – The Story of Richard Wagner's Granddaughter*. New York 1944 (邦訳: フリーデリント・ワーグナー, ページ・クーバー『炎の遺産 リヒャルト・ワーグナーの孫娘の物語』北村充史訳, 論創社, 2011年) 参照。
- 13 ニーケ・ワーグナーの著書 Nike Wagner: *Wagner Theater*. Frankfurt a.M. 1998 参照。
- 14 ゴットフリート・ワーグナーの著書 Gottfried Wagner: *Wer nicht mit dem Wolf heult – Autographische*

- Aufzeichnungen eines Wagner-Urenkels*. Köln 1997 (邦訳：ゴットフリート・ヴァーグナー『ヴァーグナー家の黄昏』岩淵達治, 狩野智洋訳, 平凡社, 1998年) 参照。
- 15 記録は LA S.464-495 による。
- 16 OGB P. 99 - 101 および Penelope Turing: *New Bayreuth*. 1969 (邦訳：ピネラピ・テュアリング『新バイロイト』徳永淑春訳, 富山房, 1972年) [以下, テュアリングと略記] 64-67 頁参照。
- 17 OGB P.102-105 およびテュアリング 92-96 頁参照。
- 18 OGB P.114-117 およびテュアリング 115-118 頁参照。
- 19 OGB P.128-130 およびテュアリング 252-254 頁参照。
- 20 OGB P.118-127 およびテュアリング 155-164 頁, 吉田秀和, 渡辺護『バイロイト音楽祭』音楽之友社, 1984年 [以下, 吉田・渡辺と略記] 59-61 頁参照。
- 21 OGB P.135-145 および吉田・渡辺 63-67 頁参照。
- 22 OGB P.160-165 および三宅幸夫『バイロイト音楽祭Ⅱ』音楽之友社, 1987年 [以下, 三宅と略記] 49-52 頁参照。
- 23 OGB P.176-177 参照。
- 24 テュアリング 101-108 頁参照。
- 25 テュアリング 196-202 頁参照。
- 26 OGB P.131-134 およびテュアリング 269-272 頁参照。
- 27 OGB P.156-159 および三宅 65-66 頁参照。
- 28 OGB P.180-186 参照。
- 29 OGB P.146-150 参照。
- 30 OGB P.170-175 参照。
- 31 OGB P.150-155 参照。
- 32 OGB P.168-170 参照。
- 33 OGB P.187-193 参照。
- 34 記録は OGB P.96 による。